

ネルヴァルの旅

水野 尚

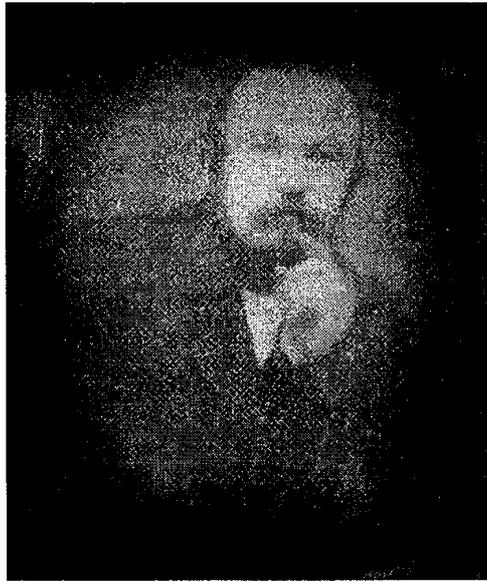
歩く。ただただ夜の街を歩く。その時、パリ以上に美しい街があるだろうか。暗いセーヌの水面に映るオレンジ色の揺らめき。長い歴史を生きる建物のほのかな息吹。ピンと張りつめた空気の鼓動。そして古い劇場の前。芝居の余韻にさめやらず、耳元ではまだ役者たちの言葉が響いている人の波。ふとネルヴァルの姿を探す。彼も一五〇年以上前にはこうした人々に混ざって、劇場を後にしたことだろう。そして人の流れから離れ、足早にレ・アールへと向かう。今では巨大なショッピングセンターになってこの場所が、かつてはパリの食を一手に引き受ける市場だったなどと、信じられるだろうか。時が過ぎ、街は変わる。確かに！でもパリはネルヴァルの時代と同じように、人々を魅惑し続ける。

ジェラルド・ド・ネルヴァルはパリに生まれ、パリで死んだ。緑豊かなヴァロア地方で幼年時代を過ごし、黒い森におおわれたドイツや不思議な光を放つオリエントを旅したとしても、決してパリに「アディユー、さよなら」は言わなかった。現実のパリと夢としてのパリを同時に生き、シャトレ広場の前で魂になり、天に昇る。小さな文字がぎっしりと書き込まれたメモを、この世に残して。

ナポレオンの時代に生まれ、ナポレオン三世の時代に四七歳で亡くなった作家。そんな古い時代の異国の文士の

書いたものなど、二一世紀を生きる日本人が今さらなぜ読むのか？

今からぼくは、その問いに答える旅に出ようと思う。



古びた銀版写真の上のネルヴァルは、ピラミッドの前に座るスフィンクスのように謎めいた様子をしている。人さし指を唇に当てたその表情を読み取るのは難しい。ふと思いついたことを漏らしてしまふのを恐れているのか、それともぼくたちが何かの秘密を漏らさないように「シ」。と言っているのか。メラニコリックに「彼方」を見据える眼差し。

「夢は第二の人生である。」（『オーレリア』）ぼくたちは、目に見えるものだけではなく、心とか夢とか愛など非物質的なことも感じながら生きている。もしかすると、夢の方が大きな力を与え、現実の活動を生み出す源になっているのかもしれない。――「シート。」大地に足をし

っかりとつけていないと、社会の競争を勝ち抜いてはいけない。落ちこぼれたくなければ、引かれたレールの上に。そして、わき目もふらず、前へ前へ。

ネルヴァルは？ 彼は道草の王様。一直線に進む時間から見放されたかのように、ゆっくりと呼吸する。心の底では焦っていたかもしれない。何とか追いつこうと。しかし、彼の目には、彼の耳には、彼の心には、別の世界が広がり始める。いや、この世界がもう一つの姿をまといは始める。

春になると鳥が生まれ、さえずりはじめる。

あの声が聞こえない？

清らかで、シンプルで、心を動かす

鳥の声 — 森の中の。

「森の中」

誰の耳にも届く小鳥の歌声。かつてはその歌声に誰もが耳を傾けていた。スピーカーから流れ出るビートのきいた大音量の音楽にかき消されてしまう、かすかな歌声に静かに耳を澄ますのは、心をときめかすのは、わずかな者たちだけ。心の中に「森」を持つ者たちだけ。

ネルヴァルは季節を感じ、季節を呼吸する。春だから気持ちがいいわけではない。好きな春もあれば、そうでない春もある。すべてが同じ春ではない。

いい天気が続き、ほこりがたってきた。

空は青く、きらきらしている。

壁も陽に照らされ、夕方がのびてきた！。。。

(・・・)

こんなに天気だと気が重い。退屈だ。

何日か雨が降れば、

一枚の絵のように

緑息づくばら色の春が浮かび上がってくる。

「三月二五日」

何とみずみずしい感性だろう。ネルヴァルは、花に水をやるように春に水をやり、緑を芽吹かせる。日本では夏の暑い夕方、打ち水をする習慣があった。この詩には、あの涼しさが漂っている。すがすがしい雨の中に世界が蘇る。

もう一つだけ、ネルヴァルの感受性がよく表現されている詩を読んでみよう。ここでは、祖母の死の思い出が語られる。

祖母が亡くなってもう三年になる。

いい人だった。― お葬式の時、

親戚も友だちもみんな泣いた。

本当につらくて、悲しかったから。

ぼくは、家の中をうろうろしていた。

悲しいというよりもびっくりして。

お棺の近くにいったとき、

ぼくが声を出して泣いていないと、誰かがぶつぶつ言った。

騒々しい苦痛はすぐに過ぎ去る。

三年の間にいろいろなことがあった。

いいことも悪いことも、革命も。

そして、祖母の思い出を心の中から消していった。

でもぼくは、祖母のことを今でも考え、よく涙を流す。

ぼくの中では、木の幹に掘られた名前のように、

祖母の思い出が、時間とともに力をまし、

もっと深く刻み込まれていく。

「祖母」

悲しみは忘れ去られる。もちろん、そこに救いがある。もし悲しみを忘れることができなければ、どんなに辛い人生を送ることになるだろう。人は大きな声を出し、おおげさな身振りでさよならの仕事をし、悲しみに区切りをつけ、次のステップを踏み出すのかもしれない。しかし、もう一方にはネルヴァルのような人がいて、消え去った人の記憶をいつまでも胸に留めておく。思い出が深くなる。

こんなに繊細な感性が厳しい現実さらされたとき、いったいどうなってしまうだろうか。大きな時間の渦に飲み込まれ、打ちのめされ、こなごなに砕かれてしまうのだろうか。確かにネルヴァルは狂気に襲われた。三三歳のときのことだ。夜のパリの街を歩き始めた。「東に向かって。」（『オーレリア』）——なぜか服も脱ぎ捨てる。夜

回りの警官に連れられ交番の独房へ。そして、精神病院へと向かう。しかし、だからといって、現実生活に無関心で、逃避していたわけではない。むしろ心が潤っていればいるほど、現実を生きることには無頓着ではなかったはずだ。

一八三〇年に起こった七月革命の後、ネルヴァルたちは希望と失望を味わう。自由と平等を求めた革命は、結局、資産家の利益にしかつながらぬのか？ 政治は再び保守化し、反対意見が言いにくい世の中に逆戻り。ちよつとした遺産を手に入れたネルヴァルはイタリアに旅し、パリでは若い芸術家や作家仲間と共同生活をはじめ。ルールのすぐそば、今はガラスのピラミッドの立つドワイヤネ街の安アパートが彼らの住み処だ。駆け出しの女優を集めてのどんちゃん騒ぎは毎晩のこと。恋心をくすぐられることも少なくなかつただろう。その上、美しい版画の入った豪華な演劇雑誌を創刊する。そんなこんなで遺産をあつという間に使い果たしただけではなく、借金までこしらえてしまう。若いうちしか許されない放蕩生活。

しかし、劇作家になる夢を持ちながら、ジャーナリストとしても生き始めていた。劇場に通い、劇評を書く日々。当時は検閲があり、そのために上演が許可されなかつたり、セリフが削られたりもしていた。しかも、その時代、文学は政治を動かす大きな力を持っていた。大革命以降、人々はパリに殺到し、わずかな期間に人口が膨れ上がり、貧しい人々のたまり場があちこちにでき上がる。普通の人々は恐れておちおち歩けない「犯罪大通り」。泥棒や殺人が多発する。人々は詩や小説を回し読み、思想を戦わせ、芝居小屋に足を運ぶ。文学者やジャーナリストはそんな時代のオピニオン・リーダーでもあった。一方、経済的な成功をつかむ一番の道は、演劇。小説や詩とは比べものにならないほどの収入が得られた。ネルヴァルは成功を夢見て、あのアレクサンドル・デュマと共同で芝居を書いたりもした。

それなりに抜け目なく立ち回ることもできた。一八三八年、ドイツの政治を舞台にした芝居をデュマと一緒に書くため、二人はライン河にそった地方を旅した。取材旅行だ。デュマはもちろん一筋縄でいく人間ではない。劇のための取材の一方で、紀行文を雑誌社に売り込むことも忘れない。行く先々では有名作家として豪華な歓迎を受ける。しかも、愛人の女優イダ・フェリエ同伴。彼女はドイツ語が堪能なため通訳でもあつたらしい。しかしネルヴァルだつて負けてはいない。旅費はデュマ持ちで、それを旅先に送ってもらう約束を取り付けてある。その上出発前から紀行文を安い値段で雑誌に売り込み、まんまとデュマを出し抜くことにも成功する。デュマの旅行記の前に彼のものが雑誌に出た。デュマは別の機会を探さなければなかつた。芝居は二本書き、作者の名前は折半にする。政治と恋の『レオ・ブリュカール』はネルヴァル作、天才と社会の葛藤を描く『錬金術師』はデュマ作というように。上演中に新聞に台本を連載。それが終われば資料を付けて出版。生き馬の目を抜くジャーナリズムの世界で、ネルヴァルは少しづつ自分の地位を築いていく。

夢だけで人間は生きられない。しかし夢がなくてはつまらない。ネルヴァルは食べていくために新聞や雑誌に記事を書き、自分の名前の芝居も上演された。詩もやめるわけではない。政府から補助金を引き出して旅行をし、紀行文を出したりもする。ゲーテの『ファウスト』の翻訳をしたのが一九歳の時。それ以来、ドイツ文学の翻訳家でもある。物書きとしてある程度やっていける目処もたってくる。

そんな矢先、停滞の時期がネルヴァルを突然襲う。なぜかはわからない。一八四一年二月末。その時彼は狂気の体験の中で何を見たのだろうか。精神病院の中。他の狂人たちの姿。突然暴力的になる自分。医師の治療。鉄格子の窓。「夢の世界が現実世界に侵入」（『オーレリア』）と彼は後に書くことになる。とにかく十一月までの九ヶ月間を病院で過ごす。そんな時、有名なジャーナリストがこの件をからかうような調子で新聞に書き、世間に公表して

しまう。誤った死亡宣告。ネルヴァルの驚き、悲しみ、そして怒りはどれほどのものだっただろうか。しかも彼はまだ病院にいる。いくらこの体験について、「楽しい夢を見たようなものでした。今ではそれを懐かしいと思っっているのです。」（一八四一年十一月、アレクサンドル・デュマ夫人宛の手紙）などと書いても、誰もまじめに受け取ってはくれないだろう。やっぱり狂っている、と。

「祖母」の詩人の思い出したいくない出来事。退院後の活動は停滞ぎみだ。仕事をするだけの精神力がなかったかもしれない。充電期間というにはあまりにも苦しい時。そんな中で、小さいころ預けられていたヴァロワ地方の民謡を集め、出版する。人生に行き詰まったときに振り返るのは、懐かしい故郷かもしれない。小さいころ耳にしていた歌声が、ある年齢に達すると再び蘇ってくる。パリの北に広がる森深いヴァロワの地は、古いフランス王家の土地であり、フランスの故郷でもある。パリの洗練からはほど遠い素朴な唄が、魂を癒してくれたのだろうか。

もし燕だったら！

飛ぶことができれば、

あなたの胸の上で、美しい人よ、

安らぐことができるのに。

「フランスの古いバラード」

ネルヴァルの心に、この詩が懐かしいメロディーとともに蘇ったに違いない。私たちが「夕焼け小焼け」の歌詞を思い浮かべるとき、自然にメロディーも浮かんでくるように。韻を踏んでいなかったり、不規則な音のために、いつしか忘れられていくこうした古い唄。ネルヴァルはヴァロワ地方に伝わる唄を口ずさみながら、深い霧に覆わ

れた森を歩き回っていたのだろうか。それともパリのうらぶれたアパートで思い出していたのだろうか。とにかく、失われていく田舎の民謡を書き留めていく。

ルイ王が城の掛橋の上にいる。

膝に娘を抱いて。

娘は父に騎士と結ばれたいと言う。

一文無しの騎士と！

「どうしても結婚したいの！

私を生んでくれたお母様に反対されても。

親戚がみんな反対しても。

お父様でも同じこと。大好きなお父様でも。！

――娘よ、愛を変えなさい！

そうしなければ塔の中に閉じこめるぞ。

――塔の中で死んだほうがまし。

お父様。愛を変えるよりも！

― 急げ。召使いはどこにいる。

歩兵はどこだ。

娘を塔に連れていけ。

もう陽の目を見られぬように。」

娘は7年塔の中にいた。

話し相手も誰もいなかった。

7年後

父がやってきた。

「娘よ、どんな具合だ？」

― お父様。具合がよくありません。

足が地面の中で腐り

わき腹が虫に食われています！

― 娘よ、愛を変えなさい。

そうしなければまだこの塔に閉じこめておくぞ！

― 塔の中にいたほうがましです。

お父様。愛を変えるならば！」

「フランスの古いバラード」

愛する娘は意志が堅い。どんな反対があっても愛を守る。塔の中に閉じこめられ、身体がぼろぼろになり、苦しみが堪え難くなっても。何と強い意志の力だろう。何と激しい愛。姿のない恋人。父と娘。残酷なまでに激しい感情が、美しい調べにのって歌われたことだろう。

この話には続きがある。娘が墓地に葬られようとしているとき、恋人ロートレックが遠い国から戻ってくる。そして棺を奪い、純金のナイフで死装束を切り裂く。すると娘は蘇り、二人は結ばれる。「こうして二人は幸せに暮らしましたと思うかもしれない。」とネルヴァルは付け加える。

しかし一度おだやかな結婚生活になれてしまうと、ロートレックは平凡な夫になってしまい、湖の辺で釣りばかりしている。ある日誇り高い妻は、そと彼の後ろに近づき、意を決して黒い水に彼を突き落としてしまう。こう叫びながら。

あっちに行っておしまい。釣りばかりのつまらない男は。

魚がおいしくなかったら

私たちが食べてあげるわ。

アルカボンヌやメリユジーヌのような不思議な言葉。息を引き取りながら、哀れな城主ロートレック

クは力を振り絞り、ベルトから鍵を外し、王の娘に投げてやる。これからは彼女が城の主だ、彼女の意志で死ぬるのは幸せだ、と言いついで……。この奇妙な結末には、何かしら人の心を打つものがある。この唄を作った詩人は何かの皮肉で終わらせたのだろうか。それとも、ロートレックが棺桶から助け出した美しい死女は、よく伝説に出てくる女の吸血鬼だったのだろうか。

「フランスの古いバラード」

不思議な結末はヴァロワ地方の神秘的な雰囲気を漂わせている。深い森の中を幾筋もの小川が流れ、数多くの池を形作っている。ドルメンが立ち、奇妙な像の欠片があちこちに散らばっている。立派な城やカテドラルがあるかと思えば、崩れた僧院が昔の面影をかすかに留めていたりする。民謡は元々そうした地方の独特な表現にちがいない。たとえそれが土地から遠くに運ばれたとしても。どこに行っても、土地の香りは残る。パリの詩人ネルヴァルのもう一つの故郷ヴァロワ。パリでの苦しみがヴァロワの唄で癒される。故郷はありがたきものかな。

その後ネルヴァルはオリエントへ旅立つ。ヨーロッパ文明の起源であるギリシア。その起源のエジプト。今こそオリエントへ。この旅も、彼にとっては、生命の源への回帰だったのかもしれない。

マルセイユから船に乗り、ギリシアの島々を通ってエジプトに向かい、三ヶ月を過ごす。その後レバノンにしばらく滞在した後、イスタンブールに向かう。異国趣味が盛んだった当時のヨーロッパにおいて、遠くから見るオリエントは「千一夜物語」の国だった。アラビアン・ナイトの世界。しかし、実際の町は薄汚れ、貧しい人々で満ちあふれている。「夢で見るオリエントはヨーロッパにしかない」(我が友テオフィール・ゴージェエへ)、一八四三

年九月六日付『コンスタンチノール通信』と、ネルヴァルは帰国途上の手紙で書き送る。しかし、本当に失望したのだろうか。

ネルヴァルは、急ぎ足で名所旧跡を見て回りはしない。見知らぬ町をさまよい、時間を気にせず、偶然の出会いを大切にす。それが彼の旅の詩学だ。

私はこれまで観光ガイドの順番通りに名所旧跡を見て回らないことしてきた。由緒ある建物や芸術作品に特に関心を払うこともなかった。一度町の中に入ったら偶然に身をまかせた。町の中をさまよううちにいつも何かに出会うと思っていたから。こうした無関心のために見ることができなかったものも多いだろう。しかしそのおかげで、思いがけない出会いや感心するものを見ることがもできた。もしガイドがいたら見ることはできなかつたり、印象を壊されたりしたようなものもあった。旅行してとくに好きなこと。それは森や平野の空気を吸い込むこと。フランドル地方の長く伸びた霧深い草原を急ぎ足でたどったり、太陽に照らされて黄金に輝くイタリアの明るい田舎をゆっくりと進んでいくこと。偶然に身をまかせながら町中のくねくねとした道を歩きまわること。奇妙な言葉や話を話す雑多な色の服を着た人々の中に身を潜ませること。人々の常に変わらぬ生活に一日入り込むこと。

「メッセージ」誌、1838年9月18日

フランドルやイタリアだけではなく、カイロやイスタンブールでも同じように町の空気を吸い込み、ぶらぶらとあ

でもなく狭い路地を歩き回ったことだろう。ネルヴァルは髪を切り、オリエント風の服を着る。パリでみんなが思い描くオリエント風カフエがエジプトになかったからといって失望することもない。彼はみんなの思い込みを逆手に取り、一筋縄ではいかないオリエントを描き出そうとする。パリで空想するイスラム世界はマホメッド以後のアラブに彩られたオリエント。ネルヴァルは民衆の中に入り込み、イスラム以前のエジプトを見る。ピラミッドやアラオの古代世界。救い主ホールスを抱いたイシス女神。それはまた幼子イエスを抱くマリアのモデルかもしれない。すべてはエジプトで生まれたのか？

起源への旅、それはまた復活の旅でもあった。地中海の反対側からの帰還は「無」からの再生ともいえる。ネルヴァルはパリの現実を再び生き始める。ジャーナリズムに身を投じ、数多くの劇評を書く。やはり芝居からは離れられない。オリエントの影響か、神秘主義にも興味を示す。内の世界と外の世界はつながっている。地上の世界の上には目に見えない天上界があり、地上の出来事は彼方の世界と対応している。

上下二つの世界を水平に並べれば、それは西洋と東洋。ヨーロッパ社会の裏返しとしてオリエントは、一方では夢の国であり、他方では無知と貧困の国。多くの人々は、ヨーロッパにないものを地中海の向こう側に求めた。

しかし、ネルヴァルはその罫にはまらない。約十年を費やして徐々に書き上げた『東方紀行』には、ヨーロッパ人たちの偏見を面白おかしくひっくり返すネルヴァルの柔軟な精神にあふれている。例えば、ヨーロッパではハーレムは男たちの夢だ。しかし現実のハーレムは男性に多くの義務を強いる。あちらではヨーロッパの服が笑いものの対象になる。こちらの国にはこちらなりの考え方があり、あちらにはあちらの見方がある。郷に行っては郷に従え。そして自分たちの世界をもう一度別の目で見直す。ちょうど彼の狂気に対する偏見を振り払うかのように。ネ

ルヴァルは紀行文の中で異国の風俗を生き生きと描きながら、自分たちの世界の先入観を見直し、自分を探しはじめる。

一八五〇年、四二歳。彼には、まる五年しか生きる時間が残されていない。もちろんこの時点でそんな予感はない。旅の目的地を遠くの国から、自分の故郷であるヴァロワ地方やパリに変えただけ。しかしそのことで旅行記は自伝的な色合いをおびることになる。これからたどるのは、思い出がしみこんでいる懐かしい場所。紀行文が追憶の詩へと姿を変える。

時は十一月一日、万聖節。いわば秋のお盆。死者たちを弔う日。彼はふとこうもらす。「この季節、長旅は避けたい。パリから四〇キロ四方をいろいろ探してみるだけにする。」もちろん目的地は霧のヴァロワ地方。サンリス、シャンテイ、エルムノンヴィル……。

狩人でなければ秋の風景のこの美しさは十分に味わえない。——今、朝もやがかかっているが、フランドルの偉大な画家の絵のような景色が目の前に広がっている。(……) 見えるのは、バラ色や青みがかかった色合いの空。枯れかかった木の葉。——向こうに畑がのび、手前には田園風景。ワットーの絵画「シテール島への旅」は、この地方の色彩豊かで透き通ったもやの中で構想された。あのシテール島は、オワーズ川とエーヌ川の氾濫が作り出したこれらの池にある、小さな島を下敷きにしている。

「塩密売人」

古代ギリシアの愛の女神アフロディーテの島、シテール。彼の地への巡礼を甘美に描くワットーの絵画が、フランドル派の風景画に重ね合わされる。絵画を通して現実を見ることで、現実が絵画的になる。ネルヴァル自身が風景画家になり、「この季節に見ることのできるもつとも美しく哀しい景色」を描く。柏や榿の木の赤みがかかった色合い。下草の深い緑。ヒースやいばらの上にくっきりと立つ白樺の白い幹。どこまでも続く堂々としたフランドル街道。もやのかかった大きな森。「こうしたものすべてが私を夢想に誘った」と、旅人はふと書き留める。パリの喧騒に疲れたネルヴァルは、豊かな田園風景を目にし、癒しを感じる。

理屈で何と言ったとしても、実際には、私たちは生まれた土地とたくさんのかんじで結ばれている。誰も祖先の灰を靴の裏につけて持ち運びはしない。——しかし、もつとも貧しい人でさえ、自分を愛してくれた人たちのよすがとなる神聖な思い出をどこかに携えている。宗教でも哲学でも、すべてのものは、思い出に対する永遠の信仰を人々に示している。

「塩密売人」

思い出に対する永遠の信仰！ ヴァロワ地方の自然がネルヴァルにとって叙情的に感じられるのは、さまざまな思い出が深く刻み込まれているから。目の前の風景が絵画を通してフランドルやギリシアを心の中に呼び起こし、同時に「私」

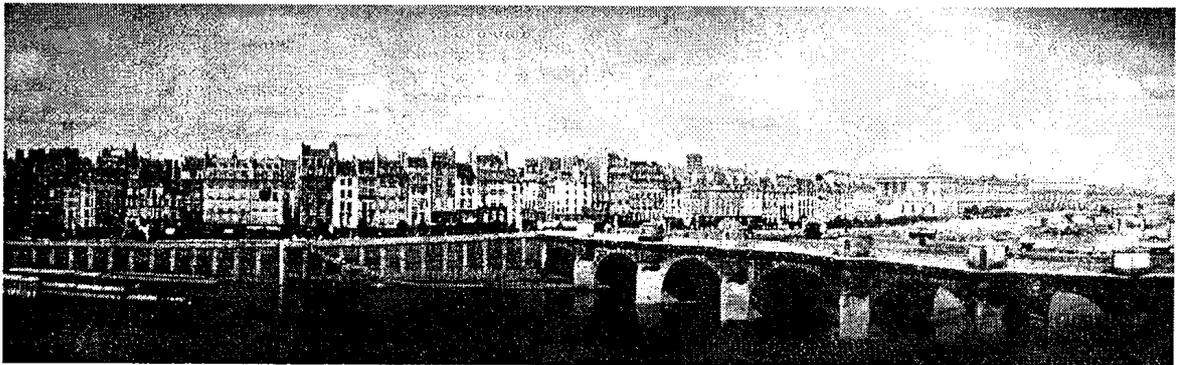


の過去の記憶を目覚めさせる。現実が厚みをまし、命の暖かさを伝える。サンリスの聖堂から出たとき、旅人は少女たちが歌う童謡を耳にし、踊る姿を耳にする。ネルヴァルには、それはギリシアの島の娘たちの踊りにも見える。思い出が重なり、共鳴する。ヴァロワからギリシアへ、ギリシアからヴァロワへ。彼は懐かしさに思わず涙する。

決して過去に逃避しているわけではない。ネルヴァルは言う。「人生のなかばになると、子供時代の思い出が生き生きと蘇ってくる。」（「塩密売人」）あるいは、「四〇歳をすぎると人は今の人生と過去の人生を二重に生きるようになる。」（「ニコラの告白」）人間は今を生き続ける。一瞬の休みもなく。思い出は過去にではなく、現在にこそある。今がなければ何も思い出せない。思い出は「私の今」の一部なのだ。叙情は「私の過去」に由来し、ポエジーの源泉となる。

幼年時代のヴァロワから青春のパリへ。パリにあるのは自然の風景ではなく、ルーブルの近くの古びた屋敷での気ままな生活。失われしドワイヤネ街が思い出の中であつての活気を取り戻す。詩人、画家、女優の卵たちが、夜を明かして踊り歌い、人生を享受する。友情や恋が絵画や詩を生み出す。「われらは楽園の住人。」

今ではもうすっかり有名になった、我々の友人の画家たちの手によ



って元の姿に戻された司祭の古いサロンでは、女優たちの楽しげな笑い声やばかげた歌と一緒に、恋の詩が高らかに鳴り響いていた。お人よしのロジェはひげの中でにこにこ笑いながら、梯子に上って海の神ネプチューンの絵をガラスのかもちの上に描いている。その絵が彼と似ていることといったらなかつた。扉の両開きのドアが大きな音をたてて開く。テオフィールだ。彼は座ろうとして、ルイ十三世時代風のひじ掛け椅子を壊してしまった。急いでゴシック洋式の椅子を持っていく。すると彼は初めて作った詩を朗読する。金髪のサラのハンモックが大きな部屋の隅から隅につり下げられ、シダリーズ一世やロリやヴィクトリーヌがのんびりと揺られていた。

「粹な放浪生活」

カミーユ・ロジェもテオフィール・ゴーチエも、まして女優の名前など知らなくてもいい。このみずみずしい情景はそれだけで、恋と詩の生まれる瞬間をとらえている。娘たちは笑いこけ、ハンモックの上でふざけあう。画家は筆を動かし、詩人の言葉が高い天井に響く。ではジェラルルはどこにいるのか。私たちの詩人は？ — 彼もまた詩の中にいる。

おー、ジェラルルよ。どうしてそんなにまじめくさっているんだ。

オペラ・コミック座の美しい瞳が

どこか別のところで輝くのだろうか。サバトの女王は

ふた冬前から君の腕の中でもがいていたが、

まぼろしのように逃げていくのだろうか。

君はこう答えた。「女はなんとにがきもの！」

「粹な放浪生活」

これが、「二十歳」と題されたアルセーヌ・ウツセーの詩の中に描かれた若い時代のジェラール・ド・ネルヴァルの肖像画である。過去がよみがえり、そこから新たな「私」が生まれる。

ネルヴァルの傑作の中でもっとも美しい作品の一つ『シルヴィ』は、「私」がある劇場から出てくるところから始まる。「私は彼女の中に生き、彼女は私のためだけに生きていた。」（『シルヴィ』）女優への激しい想い。これはウツセーの詩の中に描かれた「粹な放浪生活」時代のジェラールの姿だ。しかし、劇場という非現実の世界の愛は、舞台と客席の距離があつてこそ。現実には幻滅を招きかねない。もし理想に手が届いてしまったら……。

そんな時ふとヴァロワ地方の古い祭りの記事が目に入る。幼い時代を過ごした懐かしい土地。心をかき乱す魅惑の都パリから逃れ、緑豊かな故郷に戻ろう。夜馬車に乗れば朝には着くはず。そうすれば、昔と同じようにシルヴィが迎えてくれる。愛しいシルヴィ。そんな希望に誘われてヴァロワ地方へ向かう「私」。

馬車の中、思い出がよみがえる。古い城の前で輪になって歌う子供たち。「私」にはシルヴィしか目に入らなかつた。城の娘アドリエヌが出現し、「私」の心を奪い去るまでは。

突然、踊りの規則に従って、アドリエヌが私と一緒に輪の中心にいた。背は二人とも同じくらいだった。みんなは私たちが抱擁するように言う。踊りと歌がもつと早く回り始める。口づけをする

とき、手をぎゅつとにぎってしまった。金髪の長い巻き毛が私の頬にふれる。その時、今まで味わったことのないような動揺が私をとらえた。――美しい娘が踊りの輪に戻るためには歌を歌わなければならなかった。みんな彼女のまわりに座る。とすぐに、霧深いこの地方の娘たちの、生き生きとし胸にしみわたる、わずかにヴェールのかかったような声で、メランコリックで愛に満ちた古い唄の一つを歌った。愛のために父から罰せられ、塔の中に閉じこめられる不幸な王女の唄。
 (・・・) 彼女の歌声につれて、大きな木から影がのびてきた。そして、生まれたばかりの月明かりが、聴き入っている私たちの輪から一人離れたアドリエンヌだけを照らし出した。

『シルヴィ』

もつとも美しいフランス語で描かれたもつとも美しい一枚の絵画が、読者の前に広げられる。しかもアドリエンヌは、ヴァロワ地方の伝説の一つ、ルイ王の娘の不幸を歌う。そう、愛を変えない娘の唄だ。「私」の思い出が個人を越え、ヴァロワの記憶に達する。「祖母」の詩人の筆は過去へと向かう。一方、月の光の下のアドリエンヌは、ライトに照らされた女優そのもの。今の「私」の愛はこの思い出から生まれたのではないだろうか？ もしアドリエンヌとオーレリーが同じ人であったとしたら！しかし、そんな一致は夢の世界に属するといってもいいだろう。

現実に戻ろう。ここではシルヴィが待っていてくれるはずだ。確かに彼女はヴァロワの地にいる。以前と同じように。そして「私」をにこやかに迎えてくれる。しかし、もう昔と同じではない。時間は前へ前へと進み、後戻りはしない。シルヴィは結婚が決まり、「私」の手が届かないところにいた。現実の世界の中で、時間は過去を押し

流してしまう。

ならば夢の女性オーレリーをアドリエンヌの地に導き、夢を実現できないか。もちろんそんな期待も裏切られる。「私」はパリの女優を、かつてアドリエンヌが出現したヴァロワの地へと導く。しかしオーレリーはきっぱりとアドリエンヌとは何の関係もないと言い残して、別の男性へと向かう。

物語の最後、シルヴィが「私」にこう告げる。

「かわいそうなアドリエンヌ。聖……修道院で死んでしまったの。一八三三年頃に。」

『シルヴィ』

すべてが失われ、「私」に残ったものは苦い経験という果実だけ。物語だけを追っていけば、二人あるいは三人の女性を愛した男の身勝手な話にすぎない。

しかし「シルヴィ」は今でも多くの読者を惹きつけてやまない。その秘密は、パリやヴァロワ地方の生き生きとしたシーンが美しいフランス語の糸で織り上げられ、しかも、さまざまな時代の思い出がもつれ、ほぐれ、重なりあい、「私」の物語が織りなされるところにある。

『シルヴィ』の時間旅行は、現実と思いが織りなす万華鏡の世界。オーレリーが、シルヴィが、アドリエンヌが、消えてはまた現れる。そうしたはかない夢のかけらたちの軌跡は、しかし、作者ネルヴァルの架空の自画像を描き出す。束の間の現実ではなく、変わることのない真の世界を追い求めた魂の告白録。

もう一つの傑作『オーレリア』は、狂気と幻想を描いた自伝的物語であると言われることがある。確かにそこには狂気の発作と、それに続く多くの奇妙な夢が語られている。またこの作品に取り掛かっている時期、ネルヴァルがしばしば発作に襲われたことも知られている。しかし、だからといって、『オーレリア』は決して狂人のたわ言などではない。

「夢は第二の人生である。」

『オーレリア』

「人生は夢」というシェークスピアの言葉を想わせる、この『オーレリア』の最初の言葉は、彼のこれまでの人生すべてをかけた言葉だった。

実際、夢ほど生々しいものはない。昔から、現実はまだ一つの世界の影にすぎないと考える人々もいる。あちらが本当の世界で、ここは一時の宿。魂こそが真の人間の姿であり、この世に生まれてくるときにまとう肉体は魂の牢獄であり、すぐに滅びるもの。夢や狂気は、肉体からの解放にほかならない。

『オーレリア』の「私」は数多くの旅をする。最初の旅は失恋した相手を忘れるため。旅先での目新しい出来事や新しい恋が、オーレリアを忘れさせてくれるかもしれない。しかし、思い出は深くなる。パリに戻って彼が見るのは、彼女の幻。目は落ちくぼみ、青白い顔色をしている。それがオーレリアの死か、「私」の死の前触れだと信じ込む。そして狂気の発作。パリの街を歩きまわり、最後に服を脱ぎ捨てて。夜空に輝く星に手を伸ばし、魂が肉体から離れる瞬間を待ち望む。最後に彼は捕えられ、精神病院に入院させられる。

たぶん現実の出来事に基づいたこの話を、なぜネルヴァルは十年以上もたち、再び入退院を繰り返しているときに、わざわざ語るのか。しかも雑誌に発表されるのは一月一日。死まで後二五日。過去を語りながら、死の予感があつたのだろうか。彼は狂気を、「現実生活への夢の侵入」という言葉で表現する。夢が現実にあふれ出て、現実の形を変えてしまう。生と死が入り交じった不思議な状態。

一見不可解なこうした状態は、実は私たちが普通に暮らしているときの意識の状態にはかならない。私たちは、もう会うことのできない懐かしい人を思い出し、過去の会話をよみがえらせることがある。それをもし死者との対話と呼べば何やらおどろおどろしい感じがしてしまう。しかし何も名前をつけないでいれば、ごく普通のことすぎない。

実際に『オーレリア』を少しだけ読み、「私」の連想をたどってみよう。まず最初、現実的な描写が非現実的な出来事へと自然に移行する場面。

私は郊外の街を散策しながら、宗教的な思索と結び付いた仕事のことを考えていた。一軒の家の前を通りかかったとき、誰かに教えられた言葉を話している鳥の声を耳にした。その混乱したおしゃべりは、何かの意味を持っているようだった。前に話した幻に出てきた鳥を思いだし、悪い兆候ではないかと、身体が震えるような感じがした。

『オーレリア』

何か考え事をしながら歩くことはよくある。歩くりズムが思考を活気づけ、思ってもみない発想が浮かぶ。しか

しここで「私」は鳥の声に意味があるように感じ、自分の運命の兆候を読み取る。こうして超現実が現実になすやすと忍び込んでくる。道に咲いている花を見て、何かいいことがあるかもしれないと考える。それと同じことだ。ただインスピレーションが不吉な方向を示している。

もう少し歩いていくと、長い間会っていなかった友人と出会った。彼はこの近くに住んでいて、家を見に来て欲しいということだった。彼の家を訪れ、回りがぐるっと一望できる高いテラスの上に登った。夕陽が沈みかけていた。田舎風の階段を降りながら、私は足を滑らせ、胸を家具の角にぶつけた。なんとか起き上がり、庭の真ん中まで駆け出す。死ぬのだと思い、その前に夕陽を最後にもう一度だけ見ておきたかった。死ぬ間際に誰もが感じる悲しみに包まれながらも、こんなふうにはこの時間に、しかも木々やブドウ棚や秋の花々に囲まれて死ぬことを幸せだと感じていた。しかしただ気を失っただけだった。家に戻りベッドに横になる力はまだ残っていた。熱が出た。どの辺りで転んだのか考えていると、眺めていた景色が墓地に面していることに思い当たった。そこにはオーレリアの墓がある。私がそのことを本当に考えたのは、まさにその時だった。もしそうでなく、転んだときに思い出していたならば、転んだ原因は墓のある眺めを前にして私が抱いた印象のせいだと考えたろう。— そのために私はますますはつきりと宿命を感じた。死が私と彼女を結び付けてくれなかったことがかえすがえすも残念だった。しかしすぐに、自分が彼女と一緒にいる資格がないと思った。彼女が死んでから私が送ってきた生活をつらい気持で思い浮かべ、自分を非難した。もちろん彼女を忘れたからではないし、忘れるなどということは決してない。そうではなくて、た

わいもない恋に身をやつし、彼女の思い出を汚してしまった自分を非難したのだ。

『オーレリア』

「私」は友だちの家で足を滑らせて転ぶ。そして死を予感する。おおげさな、と思うかもしれない。病的な雰囲気を感じられることも確かだ。亡くなったオーレリアへの想いは、死後も募る。その気持ちが痛いほど伝わる逸話を目にした読者は、少しずつ「私」の運命に興味を感じ、親近感を抱き始める。奇妙な夢がリアリティを増し、重々しい暗さがいつの間にか透き通ってくる。神話や歴史の知識を通して表現されるために現代人には理解するのが困難な夢、しかも切ないほど陰うつな夢の連続に、胸を打たれるようになる。そこにありきたりの物語を読み取るうとせず、一つ一つの言葉を聞き分けていくとき、ネルヴァルの声の響きが私たちの胸で共鳴しはじめる。

『オーレリア』は読むたびに私たちを現実を越えた世界に連れていってくれる。ネルヴァルを先導者として。

なぜ今さらネルヴァルを読むのか？

この旅の終わりに、その答えが見つかったといえるかどうか分からない。情報を得るためだけの本が氾濫する中で、何も教えてくれない本の価値などないに等しいともいえる。しかし、愛することに理由はいらない。一緒にネルヴァルを旅したあなたが、観光案内とは違ったパリやヴァロワ地方の魅力に出会うとしたら、いつもとは違う自分に出会うとしたら、それこそが、ぼくの問いの答えだといえるだろう。